

Current Status and Future Directions for Evaluating the International Exchange Programs of Fukuoka University and Keimyung University

Kumi ARITA^{1,2)}, Tomoko OHSHIRO^{1,2)}, Megumi KUROKAMI^{1,3)},
Youko ISHIBASHI^{1,2)}, Kazumi NISHIMURA^{1,2)}, Chinami YAMASHITA^{1,4)},
Mika TANAKA^{1,5)}, Motomu KUROKI^{1,2)}, Ikuko MIYABAYASHI^{1,2)}

- ¹⁾ *Committee of International Affairs 2012, School of Nursing, Faculty of Medicine, Fukuoka University*
²⁾ *School of Nursing, Faculty of Medicine, Fukuoka University*
³⁾ *Department of Nursing, Fukuoka University Hospital*
⁴⁾ *Department of Nursing, Chikushi Hospital, Fukuoka University*
⁵⁾ *Department of Nursing, School of Health Sciences, Tokai University*

Abstract :

The purpose of this research project was to evaluate an international exchange program started in 2008 to develop the global views of the nursing students and faculty of Fukuoka University and Keimyung University, Korea. Analyses with questionnaires were conducted for the students and faculty members of Fukuoka University who directly participated in the program in 2011 and 2012, and indicated that both the students and faculty members had a high degree of satisfaction with the program. It was also shown that the program is valuable for the development of global views, for promoting intercultural understanding and communication and for improving the way the subjects thought about international activities. To improve this program, it was suggested that the following issues should be addressed: construction of a coherent management system for the program, routine training of volunteer students for international activities, improvement of the publicity work and encouraging the active participation of the faculty.

Key words : International Educational Exchange, Students, Faculty, Nursing, Korea, Future Directions

看護学科における国際交流活動の現状と課題 — 韓国啓明大学看護学部との国際交流 —

有田 久美^{1,2)}, 大城 知子^{1,2)}, 黒髪 恵^{1,3)},
石橋 曜子^{1,2)}, 西村 和美^{1,2)}, 山下 千波^{1,4)},
田中 美加^{1,5)}, 黒木 求^{1,2)}, 宮林 郁子^{1,2)}

- ¹⁾ 福岡大学医学部看護学科 平成 24 年度国際交流委員
²⁾ 福岡大学医学部看護学科
³⁾ 福岡大学病院看護部
⁴⁾ 福岡大学筑紫病院看護部
⁵⁾ 東海大学健康科学部看護学科

要旨：本研究の目的は、看護学生と教員を対象の「国際的視野を養う」ことを目標に福岡大学医学部看護学科で独自に実施されている、韓国啓明大学看護学部との国際交流について振り返り、その現状から課題を提案することである。2007年の看護学科開設以来、2012年度まで、過去5回の相互研修の中で、2011年度の福岡大学から啓明大学への研修と2012年度の啓明大学から福岡大学への研修の2回の国際交流を振り返った。その結果、学生・教員ともに研修の満足度が高く、国際的視野の拡大、異文化の理解、教員の意識改革などに役立っていることが示された。この啓明大学との交流は、看護学科独自の交流の方法で軌道に乗りつつあるが、今後も長く続けていくためには、運営システムの構築、国際交流に関わる学生ボランティアの育成、広報活動の充実、教員の国際交流への積極的参加などの課題があることが明らかとなった。

キーワード：国際交流，韓国，看護学生，看護教員，看護学科

はじめに

平成24年度文部科学省は、大学教育において若い世代の「内向き志向」を克服し、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆を強化する基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材の育成を図るための体制整備を推進している^{1) 2)}。看護界においても、生活習慣病の蔓延や感染症拡大の脅威、健康格差など世界の健康問題は複雑化する中、その解決において看護の果たす役割はますます重要になっており、国際的に通用する医療人の育成は急務である。

福岡大学医学部看護学科は、2007年に開設し、教育理念を、「生命の尊厳に基づいた、心豊かで総合的な人間教育を基盤として、創造的で国際的・学際的視野に立った論理的・倫理的な看護実践能力を育成し、看護学の発展並びに地域・国際社会に貢献する」としている。5つの教育目標の一つには、「専門職として、幅広い社会的活動及び国際的な医療活動ができる能力の育成」があげられており、国際的視野を養うことを目標としている。その一環として、初年度には韓国啓明大学看護学部と国際交流協定が締結された。その後、相互交流を行い、5回目（福岡大学への受け入れは3回目）にあたる2012年度は、啓明大学学生および教員が福岡を訪れ、これまでの交流の経験に基づいた新たなプログラムが実施された。その結果、参加学生の国際感覚の育成や社会的あるいは人間的、成長および教員間の学術交流も具体化に向けて進展するなど成果がみられた。ここでは国際交流委員の立場から、過去2年間に実施されたプログラムを中心とした交流の経過を振り返ることにより見えた、今後の国際交流のあり方について提案する。

内容・成果

1. 国際交流開始までの経過

福岡大学では、国際センターを中心に全学部を対象とし、学生交流や研究交流などを目的に海外の大学等と交

流協定を締結し、交換留学、海外研修および海外語学研修への学生派遣や合同シンポジウムの開催など、様々な国際的なプログラムを実施することにより、本学学生の国際的な人材育成のための機会を提供している。福岡大学の海外協定大学は17カ国46大学1機関にのぼる（2013年3月1日現在）。その中で、看護学科の教育理念に即して、独自のプログラムによる国際交流を持つ必要性があげられ、2007年11月、すでに医学部間で交流が行われていた韓国啓明大学看護学科と国際交流協定の締結を行った。締結の内容は、①国際的な視野で医療・保健・福祉について考え、看護に対する認識を深める、②異なる文化や生活習慣に対する理解を深める、③教員の研究・教育の交流を推進する、の3つを目的としたものである。学生だけでなく教員の交流も目的の一つとしており、隔年毎の相互交流を行っている。これまでに、2008年度および2010年度には啓明大学学生および教員が福岡大学を、2009年度および2011年度には福岡大学学生および教員が啓明大学をそれぞれ訪問し交流をおこなってきた。時期は、両校の夏期休暇期間である8月に7～8日間実施し、研修受け入れ人数は、学生10名、教職員2～3名であった。なお、研修時の費用については、宿泊、昼食、各研修、通訳に関わる費用は研修受け入れ側が負担することで合意しているため、学生自身の研修費負担は、往復の交通費程度である。また、この研修に関わる学生のアンケートについてはその趣旨を説明し、その提出をもって同意とした。

2. 啓明大学看護学部の概要

啓明大学は、1953年に創設されたキリスト教系の私立大学校で、韓国第3の規模の都市である大邱広域市にある。緑豊かな広大なキャンパスに22学部と83学科、13の大学院を擁し、約27,000人の学生が学んでいる。看護学部は1989年に医科大学の看護学科として認可され、1993年には看護大学へ昇格、1994年には修士課程、1996年には博士課程が認可されている。大学院には老人、精神、ホスピスなどの専門看護師の課程があり、国

際交流も活発で、年に1回看護学部主催の国際看護学会が開催されている。

3. 福岡大学から啓明大学への派遣（2011年度）

- 1) 時期：2011年8月7日（日曜）～8月13日（土曜）の6泊7日。
- 2) 研修人数：福岡大学医学部看護学科の学生10名（男子1名、女子9名）、教員3名、学年構成は、2年生3名、3年生3名、4年生4名であった。
- 3) 研修学生の選抜：4月より募集を行い、国際交流委員会での書類審査、面接により候補者を決定し、教授会での承認を受けて6月に決定した。応募資格は、全学年であり、書類審査時は志望動機などを重視し、語学能力は参考程度とした。決定後は、オリエンテーションの参加を義務とし、3回に分けて韓国の社会と文化などの学習を行い研修へ参加した。
- 4) 研修プログラム（表1）

過去4年間の相互交流で訪れた教員、学生が交流の窓口を担っていたため、親睦が深まり、交流

表1 啓明大学での福岡大学受け入れ研修プログラム（2011年度）

	日時	スケジュール
8/7（日）	15:10	高速船にて釜山港到着：教職員、学生お迎え
	- 17:00	バスで大邱へ移動 宿舎へ（学生：学生寮、教員：ゲストハウス）
	夕方	夕食：招待
8/8（月）	9:00 - 12:00	学長訪問 キャンパスツアー
	13:00 - 15:50	講義：Koh教授（韓国）、塚原准教授（日本）
	16:00 - 16:50	オリエンテーション
	17:00 - 18:50	歓迎会
	夕方	教員：ファカルティーメンバー招待の夕食会 学生：啓明大学学生と自由行動
8/9（火）	9:30 - 9:50	啓明大学東山医療院病院長訪問
	9:50 - 11:50	東山医療院キャンパスツアー
	13:00 - 15:00	病院見学実習（啓明大学東山医療院）
	15:00 - 16:00	カンファレンス（病院看護部と）
	夕方	教員：ファカルティーメンバー招待の夕食会 学生：啓明大学学生と自由行動
8/10（水）	10:00 - 12:00	高齢者ケアセンター3ヶ所見学
	14:00 - 16:00	観光（ハープ市場、美術館）
	17:30 - 18:30	教員：ファカルティーメンバー招待の夕食会 学生：ホームステイ学生と自由行動
8/11（木）	9:00 - 11:50	プライマリーヘルスケアセンター見学
	13:00 - 15:00	観光：世界遺産「海印寺」
	夕方	教員：ファカルティーメンバー招待の夕食会 学生：ホームステイへ
8/12（金）	AM - 16:00	ホームステイ：自由行動
	16:00 - 18:00	日韓学生カンファレンス
	18:00 - 20:00	送別会後、ホームステイへ
8/13（土）	10:00	大邱出発
	14:30	釜山出発帰国へ

を重ねることで両校の関係も近くなっていることを感じた。プログラムは、啓明大学付属の大学病院である東山医療院の見学実習を中心に、複数の保健・医療・福祉施設の見学、両大学教授の講義、日韓学生のディスカッション、ホームステイなど基本プログラムを基に構成されていた。啓明大学は敷地が広大であり、キャンパスの中に歴史的な建造物や文化施設やミュージアムがあり、歴史、文化を学べる環境であった。特に看護学部は、2011年度に建物が新築され、学内シミュレーションセンターや講義室など最新の中で教育が行われていた。その他、大邱市近郊には世界遺産など豊かな自然に恵まれた観光地も多く、研修以外の観光案内を含め手厚い歓迎を受けた。

なお、帰国後は研修の学びを共有し、国際交流研修の啓蒙のために学生の研修報告会を実施した。

5) 研修学生の感想

研修後の学生の感想として、「様々な韓国の医療施設を見学して、違う角度から日本の医療のあり方を考えることができた」、「日本以外の国を見ることで、日本の良さも発見できた」、「前年度の研修の参加者とも会えて交流をさらに深めることができた。相互交流の良さだと思う」、「言葉は全て伝わらなくても、同じ看護を学ぶものとして通じるものがたくさんあった」、「日本語を話せる学生が多く、常に助けてもらった」など学生の研修を通しての学びは多く、満足度は高かった。特にホームステイは、韓国の社会、文化に直接触れることができ、「一番印象に残った。」など思い出深い経験であった。しかし、1週間の期間のプログラムとしては、ひとつひとつの見学時間が短く、「見学施設を減らしてでももう少しゆっくり見たかった」など、ややハードスケジュールであった。

4. 啓明大学から福岡大学への受け入れ（2012年度）

- 1) 時期：2012年8月5日（日曜）～8月11日（土曜）の6泊7日。
- 2) 研修人数：啓明大学看護学部の学生10名（男子2名、女子8名）、教員2名であった。
- 3) 研修担当：9名で構成された看護学科国際交流委員は、研修の準備、受け入れ、評価などを行った。4月の委員会発足後、計画を立案し、プログラムの検討を重ね実施した。
- 4) 研修プログラム（表2）

2012年度の研修プログラムでは、病院・医療福祉施設の見学やディスカッションなどを通して日本の看護を学ぶとともに、ホームステイを中心として日本文化や生活習慣を体験し、両国の看護や

表 2 福岡大学での啓明大学受け入れ研修プログラム (2012 年度)

	日時	スケジュール
8/5 (日)	14:50 - 17:00	博多中央埠頭到着お迎えとホテルでの全体オリエンテーション (国際交流委員, ボランティア)
	夕方	教員: ホテル周辺散策と夕食 (国際交流委員) 学生: ホテル周辺散策と夕食 (ボランティア)
8/6 (月)	9:00	看護学科棟に到着 (全教職員・学生でお迎え)
	9:30 - 10:00	医学部長挨拶
	10:00 - 10:30	オリエンテーション
	10:30 - 11:30	学科内案内
	11:30 - 13:00	歓迎会 (国際交流委員企画, 全教職員学生参加)
	13:30 - 16:00	特別講義 Shin (韓国) 宮林 (日本)
	16:30	学長訪問, キャンパスツアー
	夕方	教員: 委員会主催歓迎会 学生: ボランティア企画歓迎会
8/7 (火)	9:30 - 10:00	福岡大学病院病院長訪問
	10:00 - 14:00	病院見学実習: 福岡大学病院
	14:30 - 15:30	カンファレンス(看護部と関連病棟師長参加)
	夕方	教員: 前年度訪問教員による食事会 学生: ボランティア企画
8/8 (水)	10:00 - 11:30	精神障害者支援センター「ぶらっと」見学
	12:00 - 13:30	昼食
	14:00 - 16:00	長尾病院見学
	17:00 - 18:00	教員: 両大学教員の学術交流
		学生: 8/9 ディスカッションの準備
	夕方	自由行動
8/9 (木)	9:00 - 10:00	グループディスカッション テーマ: 学生が決定 1. 日韓の病院における看護の違い 2. 日韓の臨地実習及び看護教育の違い
		発表, 意見交換
	10:00 - 10:30	発表, 意見交換
	11:30 - 13:15	送別会 (ボランティア企画, 全教職員学生参加)
	13:50	ホームステイへ
8/10 (金)	終日	ホームステイ 教員: 自由行動 (国際交流委員: 福岡観光案内)
8/11 (土)	14:30	帰国博多中央埠頭集合, 帰国へ

文化に対する理解を深めた。

プログラム検討では, 高度な医療を提供する高度先進医療機関, 福祉施設とも連携をとりながら在宅療養への橋渡しを行う中規模病院, 精神障害者の地域生活や自立を支える地域活動支援センターなど多様な施設見学を組み入れ, 今日の日本が抱える課題である高齢化や脱施設化に対応するための我が国の試みが理解できるように工夫した。施設見学では施設概要の説明に加えて, 率直な意見交換ができるようディスカッションの時間を設け, 日本の医療の動向と看護に対する理解を深められるよう配慮した。

また, 看護学の発展とより良い看護実践を目指す研究の重要性や, それぞれの国の看護事情や

その違いを学ぶことを意図とし, 両大学の教授による特別講義を企画した。さらに, 両国の看護の違いと看護教育の違いについて, 学生同士が通訳を介さず英語で意見の交換を行うディスカッションの時間を設け, 国の違いを超えて看護について考える機会を持った。学生からは, 英語・韓国語・日本語を交え活発な質疑応答の場となった。

なお, 本プログラムは, ディスカッションや歓迎会・送別会, 観光案内などの企画やその運営は学生ボランティアによって行われている。これらの経験によって, 学生は計画的に協力して物事を作り上げていく能力や, 学生同士が国境を超えた友情をはぐくみ, 相手への配慮や尊重, 理解などの国際的な感覚を身につけることができることを目的とした。学生ボランティアは, 2012年4月～6月に掲示および口頭による説明などで募集し, 21名の学生ボランティアが集まった。学生ボランティアは, 前年度に韓国訪問をした学生を中心にリーダーを決め, 企画担当, パーティ担当, 観光案内担当など役割分担をし, 活動は計画的に行った。

さらに, 本国際交流の目的の一つである, 教員の研究・教育の交流として, 本プログラムで初めて啓明大学教員との学術交流の場を設けた。学術交流への参加者は啓明大学教員2名, 福岡大学教員17名であった。今後の共同研究などの学術交流に向けての第一歩として, 両大学教員は研究概要の紹介と意見交換を行ない, お互いの研究を知る有意義な時間となった。

5) アンケート結果

(1) 啓明大学研修生の感想 (表3)

終了時のアンケートの結果, プログラム内容に関しては, 概ね「よい」という結果であった。自由記述には「福岡でたくさんのことを学び・感じることができた」, 「細やかな配慮と準備に感動した。これからも両校の交流が続くことを願う」, 「プログラムが本当に充実しており, 時間が経つのが早かった」, 「観光だけでなく, 日本の家族の一員になれたことも貴重な経験だった」など本交流プログラムに満足が得られた様子の記載が多かった。期間については, 「やや短い」, スケジュールについては, 多くのプログラムを消化したので「ややきつい」という意見もあった。

(2) 学生ボランティアの感想 (表4)

アンケートの結果, ボランティア参加の目的について最も多かったのは, 韓国文化に興味があり, 交流を試みたかったというものであった。ほかには, 自己成長につながると思ったことや前年度

表3 啓明大学研修生へのアンケート結果 (一部抜粋) n=10

質問項目	大変良い	良い	あまり 良くない	良くない
ウェルカムパーティ	10	0	0	0
特別講義	7	3	0	0
病院実習	9	1	0	0
ぶらっと見学	9	1	0	0
長尾病院見学	9	1	0	0
日韓学生ディスカッション	9	1	0	0
フェアウェルパーティ	10	0	0	0
ホームステイ	10	0	0	0
ホテル	9	1	0	0
期間	短い (1) やや短い (5) ちょうどよい (4)			
スケジュール	きつい (1) ややきつい (5) ちょうどよい (4)			
経験したかったこと	・屋台・カフェに行きたかった ・全身清拭の演習をしたかった			
意見・感想	<p>・大歓迎して頂き1週間とても楽しかった。</p> <p>・多くの友人と接し、日本で色々経験することができてよかった。</p> <p>・福岡で沢山のことを学び、感じる事ができた。細やかな配慮と準備に感動した。今後も両校の交流が続くことを願う。プログラムが本当に充実しており、時間が経つのが早かった。次年度、福岡大学の学生を受け入れる際のプログラムの参考になった。</p> <p>・あまりにも親切すぎて、申し訳なかった。</p> <p>・1週間とてもよい経験だった。みんな親切で施設・プログラムの内容も良かった。今回の経験は一生忘れない。</p> <p>・ありがとうございました。全て印象深かった。食べ物はとてもおいしく、楽しかった。貴重な経験をさせてもらい、ホストファミリーに感謝している。このことは忘れない。</p> <p>・歓迎してくれて感謝している。福岡での時間、ホームステイでの経験はとても有意義だった。観光だけでなく、日本の家族の一員になれたことも貴重な経験だった。次回の交流で韓国に来た際、お返しがしたい。</p> <p>・病院見学はとても素晴らしかった。文化や互いの素晴らしい企画などの交流を今後も続けて欲しい。</p> <p>・この国際交流はとても感動した。このプログラムで、日本の病院の環境や日本人達、文化について知ることができた。</p>			

※数値は人数

に啓明大学研修のプログラムに参加したことがきっかけになっていた。また、自由記述では、「英語でのディスカッションは難しかったが、お互いの違いがわかり楽しかった」、「交流の中で楽しい時間を共有できて良かった」という感想があった。一方で、「時間どおりにプログラムが進まず計画変更をせざるをえなかった」ことや「連絡が不十分であった」という感想もあった。プログラム終了後の観光や食事を学生同士でできるようにしたこ

表4 学生ボランティアへのアンケート結果 (一部抜粋) n=21

質問項目	回	答
準備	充分だった (6)	まあ充分だった (11) あまり充分でなかった (0) 充分でなかった (4)
		【必要だと思ったこと】 ・英語力を身につける。韓国学生との学力の差を感じた。 ・教員との連絡調整。 ・縦の連携・メンバー間の連絡システム。 ・メンバー全員の定期的な集まり、メンバー同士の交流
プログラム中の活動について	スムーズだった (9)	まあスムーズだった (12) あまりスムーズでなかった (0) スムーズでなかった (0)
		【意見、感想】 ・お金がかかるためボランティアが多いとよかった。 ・すごく楽しくてよかった。 ・先輩方の準備が万全で努力がすごいなと感じた。 ・私たちの配慮のいき届かないところを多くの先生方が影でサポートしていただき、スムーズだったと思う。 ・プログラムが押して、遊ぶ時間や食事の時間がない。門限があり、買い物等で予定のプランが短縮された。
全体を通して	【良かった点】	<p>・事前の打ち合わせで何日の何時に何をしたらいいかが良くわかったので取り組みやすかった。</p> <p>・英語でディスカッションは難しかったが両国の違いがわかり楽しかった。</p> <p>・一人一人がきちんと行動してくれて、交流もしていたのでよかった。</p> <p>・とても楽しくお互い過ごせたこと。</p> <p>・学生同士で交流する時間が多くあったのでよかった。</p> <p>・リーダーを中心として協力し、学年関係なく交流できた。</p>
	【悪かった点】	<p>・プログラムの時間が予想以上に押した。</p> <p>・病院実習の時間は短く充分ではなかった。</p> <p>・全体の流れが良くわからなかった。</p> <p>・飾りが多すぎて、時間がなかつたりして大変だった。</p> <p>・事前の集まりに集合できず、遅刻が多かった。</p> <p>・出し物の練習は2カ月前から行ったらよかった。</p> <p>・今後継続していくためにも風通しのよい組織づくりが必要だと思う。幹事の負担が大きい。</p> <p>・移動が多いプログラムで学生が体調を崩しそうだった。</p>
ボランティア参加の理由		<p>・韓国の文化に興味があり交流してみたかった。</p> <p>・国際交流の経験を通し、自分を成長させ高めたいと思った。</p> <p>・昨年お世話になり、今年は自分が役に立ちたいと思った。</p> <p>・夏休みに学校の行事に参加したかった。</p> <p>・友人や教員に誘われた。</p> <p>・来年韓国に行きたかったから</p>

※数値は人数

とは、交流の場が確保でき学生の満足にもつながっていた。

(3) ホームステイホスト学生の感想 (表5)

アンケートの結果、日程は、概ね「丁度よい」という結果であったが、ホームステイまでの大学からの案内等は、「わかりやすい」と回答したホームステイホスト学生は約半数に留まっていた。大学とのスケジュールや連絡の調整がスムーズでなかったところがあり、さらにホームステイをする

表5 ホームステイホスト学生へのアンケート結果（一部抜粋） n=8

質問事項		回 答		
日程	日程（2泊3日）	長い（0）	丁度よい（7）	短い（1）
	滞在期間について	金銭面での支援が少ないので、少し負担があった		
	お迎えの時間	早い（0）	丁度よい（8）	遅い（0）
	お見送りの時間	早い（0）	丁度よい（8）	遅い（0）
案内	時期（6月下旬）	早い（0）	丁度よい（8）	遅い（0）
	内容	わかりやすい（3） どちらとも言えない（4） わかりにくい（1）		
	方法（説明と文書）	良かった（4） どちらとも言えない（3） 悪い（1）		
事前に欲しかった情報	<ul style="list-style-type: none"> ・福岡のどこに行きたいとか興味があることを事前に教えてもらえれば、ホームステイ中の計画が立てやすい ・家族の協力が必要なため、予定を少しでも早く調整できるように、連絡システムを見直した方がよい ・スケジュールが崩れていって途中が大変だったため、一連の予定が分かるプリントが欲しい ・韓国学生の写真など事前に欲しい ・情報が上手く伝達できないことが多かった ・テスト期間中で話し合いに参加できる学生が少なく、テスト期間前に企画した方がよい 			
気付いた点・要望	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国の方と初めて話して、その優しさや気遣いにとっても驚き感心した ・連れていく所すべてに興味を持ってくれて、何でもチャレンジしてくれてとてもうれしかった ・韓国と日本の歴史や文化について学べたこと、マナーやルールの違い、考え方の違いは沢山あったけれど、それぞれに素晴らしい国でした ・看護や大学についての話もできてよかった ・お互いに言語を学ぶことができとても楽しめた ・食べ物の違いなど楽しんでくれていた ・とても楽しい時間を過ごせたのでよかった ・自分自身の成長にも繋がった ・私だけでなく家族にとっても良い経験になった ・これからも様々なボランティアに参加したい ・韓国の学生は英語が上手で、自分もまだ英語を上手になろうというきっかけになってよかった ・ホームステイ前の交流会が長く回数も多かった ・韓国の学生に気を遣わせてしまったようだ 			
ホームステイを受け入れた理由	<ul style="list-style-type: none"> ・国際交流に興味があった（4） ・韓国に興味があり、韓国の文化などについて詳しく知れる機会だと思った ・外国の看護について知りたかった ・受け入れる家庭が足りない聞いた 			

※数値は人数

学生の興味があることなどを事前に把握しておきたかったという要望もあった。しかし、ホームステイホスト学生のほとんどは、お互いの国の文化について学ぶことができ、家族を含めて良い経験ができ自己成長につながったと回答していた。

課 題 ・ 展 望

看護学科創設後6年の間に、韓国啓明大学との過去5回の国際交流を行ない、近年2回の研修プログラムを中心に報告した。今後のさらなる国際交流の拡大へ向けて、以下本国際交流の3つの大きな目的それぞれを中心に課題について述べる。

1. 国際的な視野で医療・保健・福祉について考え、看護に対する認識を深める。

本研修は看護学科独自の国際交流研修である。7日間の日程ではあるが移動時間を含めると、実質に研修で使用できるのは5日間である。そのため、プログラム内容は、両校の教授の講義、大学の教育環境の見学、そして付属の病院見学実習を中心として、保健、福祉施設各1箇所程度、ホームステイが基本軸のプログラムとして定着してきている。また、その他の交流の時間も考えると組み込める内容もこれが限界であると考えられる。

この限られた時間の中で内容を充実させ、看護に対する認識が深められるようにする必要がある。啓明大学受け入れ時の日本での見学施設の選択については、毎回研修者が異なるので、同じ施設でも初めての見学となるが、啓明大学研修教員の専門領域に応じた要望を事前に確認し、できるだけ希望にそえる施設を選んでいる。韓国も日本と同じように少子高齢化問題を抱えており、高齢先進国として高齢者施設の見学などの興味が高いため、高齢者施設を中心に配慮した。平成24年度の見学では、新たに精神障害者の地域生活や自立を支える地域活動支援センターを取り入れた。そこでの脱施設化を図り障害者のエンパワーメントを高める取り組みを紹介し、啓明大学教員からも韓国にはない取り組みであると良好の反応が得られた。今後もプログラムには、最新のトピックスを含めた研修先の選定が必要であると考えられる。

また見学時には、質疑応答や振り返りを含めディスカッションを通し、相互の看護について考える時間を設けている。さらに、最終日に日韓学生でグループワークを通し、お互いディスカッションすることで、看護に対する理解がより深められている。韓国は同じ東アジアであり、日本と似たような文化を持っているが、看護師の役割は日本と違っている。韓国は専門看護師制度が法律として整い、看護師の権限も広い。その中で学生は、文化の違い、国家制度の違いなどにより看護も違いがあり、

そこから日本が見習うべき点や逆に日本の良い点などを考えることができ、自分たちの看護を見直す機会となっている。海外の看護を知ることで、日本の看護の中での常識を絶対的なものではなく、相対化して見るができるようになる、との報告もあり³⁾、学生は海外を経験することによって自分たちの国のことを知るこの大切さを学んでいた。共通性や自分たちと違うということから改めて自分の国を見直すという視野の転換ができる機会となっていることがわかった。

国際交流への学生の関心については、国際看護に高い関心を示す学生もいる一方で、全く興味がない学生など学生間に温度差がある。看護学科学生が一人でも多く国際交流への興味・関心をもってもらい、研修での学生の学びの共有のために、帰国後の報告会の実施を行っている。さらに、新入生に対しては別枠で報告会を行い啓蒙活動に努めている。今後も少しでも国際交流に関心を持ってもらえるように継続して広報活動を行ってきたい。

啓明大学への派遣については、15～20名程度の学生の応募があり、面接による選考を行っている。韓国への興味はもとより、距離的にも近く経費が安価であるため、短期留学に興味はあるが高額で諦めていた学生も、これを目標に自分でお金を貯め、研修を楽しみにしている。また、啓明大学側からも研修の人数を増やせないか、毎年の交流はできないかなどの提案があるが、研修施設の受け入れや予算の関係により難しい現状がある。さらに、各セメスター開始が韓国の方が日本より1ヶ月早いので、研修の時期も両校のスケジュールの重ならないこの時期しかない。また、全学科を対象とした大学の国際センターとは別の看護学科独自のイベントであり、教員が主体となって企画しているため、受け入れ時は教員がかなりのエネルギーを費やしている。さらに米国ウオッシュバン大学看護学部との研修もスタートしたため、現行の隔年毎、1週間のプログラムで啓明大学との研修を続行したいと考えている。従って、現在のプログラムが長期的に持続できるように、準備から評価までの運営システムを構築する必要がある。

2. 異なる文化や生活習慣に対する理解を深める。

異なる文化の理解を深めるには、その国へ行って感じる、その国の人と一緒に行動することが大切である。初年度の交流はボランティア学生の数も少なかった。しかし回を重ねるごとに前年度の韓国への研修参加者が積極的に参加し、ボランティア学生も増えてきた。ボランティアを経験した学生は、自分と異なる国の文化を理解し、主体的に交流を行うなど国際的な視野が広まってきている。現在のところ隔年事の迎え入れの時のみでボランティアが解散しているため、国際交流時のみの活動で

あり、継続的に活動ができていない。今後継続的に活動を行うためには国際看護に高い関心を持つ学生の組織化を行い、サークル化への活動へ伸展させて国内外での国際交流の恒常的な活動を行う必要がある。ボランティアで活躍した学生の中には、情報提供を行い、福岡市が行っているアジア太平洋子ども会議 (APCC) の招聘事業のボランティアにも積極的に参加し、アジア太平洋地域の子どもの達との交流を行った学生もいた。このように、国際交流への関心が高い学生に対しては、それを発展させることができるような情報提供を行い、また興味関心のなかった学生には興味を引く広報活動を行う必要がある。

ホームステイは直接的な文化的体験として研修でのメインイベントであり、研修生の満足度も高く、日本の学生にとっても最も印象に残る体験でもある。受け入れ時のホストファミリーの募集は、入学式で父母同伴の時に国際交流について説明し、協力を求めるようにしている。順調に必要な数が確保できるわけではないが、今までの研修においては、在学中の学生がホストファミリーとして毎回10名分の確保ができていた。受け入れたホストファミリーの満足度は高く、2日間ではあるが、啓明大学生と家族の一員としての時間を共有することにより、かけがえのない絆が生まれていることがわかった。ホストファミリーへは交通費程度の謝礼しか予算が獲得できていないため、一部ではあるが「金銭面での支援が少ないので負担があった」との反応もあった。ホストファミリーはそれ自身がボランティアでもあり、金銭面でのある程度の負担は協力してもらおうしかないが、国際交流のホームステイにおいては一部のホストファミリーに過度な負担がかからないようにする必要があること⁴⁾も述べられている。日本人の普通の生活を体験させることが大切であり、特別なことは必要ではないこと、ある程度の負担は必要であるが、それ以上に満足度の高い効果が得られることなどの説明が必要である。

3. 教員の研究・教育の交流を推進する。

教員は引率という立場ではなく、学生とともに研修を受け学ぶことも多い研修である。今までは学生と同様の文化的交流がメインであったが、2012年度は教員間の学術交流を新たに行った。その成果として、同年の11月に啓明大学で行われた国際ナショナルカンファレンスへ招聘を受け、2名の講師が講演を行った。また、韓国、タイ、アメリカ、日本の4カ国の大学が集う学術交流コンソーシアムの参加への道が開けた。今後は、大学間で同じ関心を持つ分野の共同研究などに発展できなければならぬと考える。そのためには意見交換や議論ができる英語力が必須となってくる。教員個々の自助努力も必要ではあるが、実際の関わりの中で養われる語学力もあり、個人の努力に頼っては限界がある⁵⁾とも述べられて

おり、教員がまず国際交流に参加し現場の中で語学力を養うことも大切である。

文部科学省の国際交流制作懇談会の最終報告書¹⁾の提言においても、教員自身が様々な機会を通して国際的な経験を重ね、その経験を教育へ活かす必要性を報告しており、教員に均等に機会を与えることが大切である。さらに同報告書では、東アジア、韓国との交流は、地理的・歴史的な観点から我が国と草の根レベルでの相互理解を育むことが不可欠な地域として教育に携わる者の交流の促進を求めている。看護学科の啓明大学との交流は、まさに草の根レベルの活動を実践しており今後の発展がさらに望まれる。

おわりに

啓明大学との交流は、試行錯誤を重ねながら看護学科なりの交流の仕方、年を追うごと軌道に乗りつつある。さらなる国際的視野の拡大のため、2012年度3月には、福岡大学の協定校の一つであるアメリカのウオッシュバン大学への看護研修を新たに実施した。国際的医療人の育成という目標に対してはすぐに効果が見えるものではない。しかし、今後も国際交流が充実したものになるよう看護学科国際交流委員会として支援していきたい。

謝辞

本研修プログラムでご協力いただいた福岡大学病院をはじめとする諸施設の皆様、および啓明大学看護学部との交流を始めるにあたりご尽力いただいた福岡大学医学部医学科の守山正樹教授と坂田則行教授に深謝いたします。

引用文献

- 1) 文部科学省「国際交流政策懇談会最終報告書」平成23年3月。
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/___icsFiles/fieldfile/2011/04/21/1305175_01_4.pdf
- 2) 平成24年度グローバル人材育成推進事業公募要領。
http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/data/download/01_gjinzai_kouboyouryou.pdf
- 3) 山本則子：国際交流が看護系大学院にもたらす意義、看護研究 Vol43 No.1: 19-23, 2010.
- 4) 菱田治子、学術交流協定における本学学生海外研修プログラムの報告－韓国延世大学との受け入れ・派遣プログラム－、聖路加看護大学紀要 No.34: 15-22, 2008.
- 5) 宮林郁子, 谷垣静子, 宮脇美保子, 人見裕江, 松浦治代, 三瓶まり, 矢倉紀子：フロリダ大学看護学部との交流と課題－平成13年度教育改善推進助成報告－, 米子医誌 53: 223-227, 2002.

(平成25.4.10受付, 平成25.10.10受理)